シンデレラ・マリアージュ

登場人物紹介

ゴードン
ロークス邸の執事。主人のためなら何事も厭わない。

リチャード
アルフレッドの従者。思ったことはすぐ口にしてしまう性格。

リード伯爵
マリエンヌとマーガレットの父。優しいがとても気弱な性格。

ビアード
ロークス商会の顧問弁護士で、アルフレッドの親友。

バーバラ・リード
マーガレットの母。侯爵家出身で、プライドが高く夫のことを馬鹿にしている。

マーガレット・リード
マリエンヌの異母妹。とても我が儘でかなりの浪費家。

アルフレッド・ロークス
ロークス商会の若き社長。ホテル経営者であり、「不動産王」の異名を持つほどの敏腕実業家。爵位を手に入れるためにマーガレットと結婚しようとしている。

マリエンヌ・リード
リード伯爵の娘。生まれてすぐに伯爵の愛人だった母を亡くし、伯爵家に引き取られて育つ。メイドとして酷な労働を強いられていたが……

「いったいなにをお考えですの、あなた！　こんなの正気の沙汰ではございません！」
居間から金切り声が響いてくる。
モップとバケツを手にしたマリエンヌは、驚きのあまりつい立ち止まってしまった。
居間の扉がわずかながら開いている。これでは中の会話が筒抜けになってしまうと、マリエンヌは慌てて扉を閉めに向かったが――
「よりによって悪名高い成金などに、大切な娘を嫁がせようだなんて！　とても賛成できませんわ！」
（え――娘を、嫁がせるですって？）
ドアノブを握ったマリエンヌは、そのままの姿勢で固まってしまった。
居間にはこの家の長であるリード伯爵とその妻バーバラ、そしてバーバラの産んだ娘マーガレットが集まっているようだ。
時折聞こえてくるすすり泣きはマーガレットのものだろうか。扉の隙間からはよく見えないが、妻と娘に責め立てられて、家長である伯爵はたじたじの様子だ。

「し、しかしバーバラ。成金とは言っても、相手はあのロークス商会の社長だぞ。彼は貴族にも顔が利くし、いい商売もたくさんしていると評判で……」
「そんなの、信じられませんわ！　アルフレッド・ロークスの名前でしたらあたくしも知っていましてよ。『金を積んで王宮に出入りする恥知らず』としてですけどね！」
（アルフレッド・ロークスですって？）
とんでもない名前に、マリエンヌはぱっと口元を覆う。
彼のことなら、買い物以外でめったに街に出ることもないマリエンヌでさえ知っていた。
傾きかけていた会社を建て直し、若くして巨万の富を築いた新進気鋭のホテル経営者。時を同じくして不動産王とも呼ばれるようになったが、裏では金の貸し付けを行っているらしく、あまりよい評判は聞こえてこない。彼によって破産に追い込まれた家が少なからず存在しているせいだろう。
（もしかしてこの伯爵家も、彼にお金を借りて、返せない状況に陥っているとか……？）
あり得ない話ではない。
バーバラ夫人とマーガレットの浪費癖は筋金入りだ。
毎日のようにドレス職人や宝石商をこの邸に出入りさせ、身につけるものすべてに最新のモードを取り入れている。
伯爵はそんな妻子から目を背けるためか、最近では賭け事や大酒にどっぷりはまっているようだった。それでも貴族としての体裁を保つことができていたから、領地からの上がりでなんとか凌いでいるのだろうと思っていたけれど……

深く考える時間はなかった。「わああ！」という泣き声が聞こえたと思ったら、目の前の扉が音を立てて開かれたのだ。
「もうお父様なんて知らない！　わたしは絶対、成金と結婚なんてしないんだから！」
「きゃあ！」
啖呵を切って飛び出してきたマーガレットが、マリエンヌに激突する。
はずみでふたり揃って廊下に倒れ込むと、マリエンヌの存在に気づいたマーガレットが、泣きはらした瞳を大きく見開いた。
「まあ、マリエンヌ！　おまえ立ち聞きしていたのね⁉　なんて行儀の悪い……っ」
「す、すみませ……っ」
マリエンヌは慌てて立ち上がろうとする。
伯爵とバーバラ夫人はこちらを見てあっけにとられた顔をしていた。
しかし、マリエンヌと目が合った途端、バーバラ夫人がハッと鋭く息を呑む。
「――そうよ、この娘だわ！　あなた、どうしてもマーガレットを結婚させたいというなら、この娘を使えばいいのよ！」
「え……」
ドレスを蹴り上げるようにして近づいてきたバーバラ夫人は、痛いほどの力でマリエンヌの腕を引っ張った。
「い、痛っ……！」

「年格好も同じくらいですもの。瞳の色こそマーガレットとは似ても似つかないものだけど、まあ成金風情の目を誤魔化す程度はなんとかなるでしょうよ」
「お、奥様……っ？」
バーバラ夫人のぎらぎらした笑顔に、マリエンヌは凍りつく。
夫人は立ちすくむ夫に向けて、勝ち誇った顔でこう宣言した。
「この娘をマーガレットとして差し出しましょう！　それが一番よい方法ですわ。――なにせこの娘だって伯爵家の一員ですもの。少しは家のために役に立ってもらわないと困りますからね！」

†

マリエンヌの母はパン屋の娘で、街では評判の美人だった。
たまたま視察に訪れた若きリード伯爵に見初められ、愛人の地位に就いたが――幸せは長く続かず、娘を産むやいなや流行病であっけなく亡くなってしまった。
早くに母親を失った娘を不憫に思い、リード伯爵は愛するひとの忘れ形見であるマリエンヌを伯爵邸に引き取ることにしたのだった。
それに猛反発したのが、正妻であるバーバラ夫人だ。
バーバラ夫人は、さる侯爵家の令嬢で、生まれながらに姫君のように扱われてきた。
そのため、自分の生家である侯爵家より格下とされる家柄の伯爵とは、感性から価値観からなに

ひとつ合うところがなく、ただでさえ不満を抱いていたのだ。
ましてマリエンヌが引き取られたとき、バーバラ夫人のお腹には出産間近のマーガレットがいた。
妊娠中という難しい時期に、夫が愛人の娘を引き取るなど、彼女にしたら最悪の屈辱を受けたといっても過言ではない。
おかげでマリエンヌは、物心ついたときからメイドとして朝から晩まで働かされ、屋根裏部屋の中でも一番狭く、建て付けの悪い部屋で寝起きすることになったのだ。
対照的に半月違いで生まれたマーガレットは、蝶よ花よと育てられた。
マリエンヌは妹の着替えや入浴の世話にまで駆り出され、買い物以外では邸の外へ出ることも許されなかった。貴族令嬢としての教養を身につけるどころか、年頃の娘らしい楽しみを見いだすこともできずに生きてきたのである。

それが突然、現実は思いもしない方向へ転がり始めた。
美しいドレスにヴェールのついた帽子を合わせて、庭の一角に用意された席にちょこんと腰かけるマリエンヌは、どうしたらよいのかと途方に暮れる。
今日はマーガレットの求婚相手である不動産王、アルフレッド・ロークスの訪問日だった。結婚前に一度会いたいというロークス氏の意を汲み、リード伯爵が用意したお茶会の席なのである。
その席に、マリエンヌはマーガレットとして出るはめになってしまった。
（まさか本当にマーガレットの身代わりをさせられるなんて……）

数日前にバーバラ夫人に命じられたときは、なんの冗談かと唖然としたものだ。
父である伯爵も寸前まで「無理だ」と抵抗していたが、結局は妻に押し切られてしまった。
父の沈痛な面持ちがよみがえってくる。
『すまない、すまない、マリエンヌ。だが我が家にはどうしてもこの結婚が必要なのだ……恥ずかしい話だが、わたしはロークスに金を借りていてね。とてもすぐに返せる額ではないのだよ。途方に暮れていたとき、なんと向こうから、わたしの娘と結婚したい、そうすれば残りの借金は帳消しにすると言われてね……』
やはり父は多額の借金を負っていたのだ。
金額こそ聞かなかったが、とんでもない額であることは間違いない。
この結婚話に乗らなければ、家が破産することもあり得るだろう。
結婚の期日までにはマーガレットを説得する。だから今日だけは、妹の振りをしてなんとか乗り切ってくれ――父にまでそう頼み込まれては、マリエンヌとしても断れない。
(とはいえ、貴族の令嬢らしく振る舞うなんて、とても無理よ)
つい先ほどまで台所仕事をしていた身だ。読み書きと計算ならなんとかなるが、教養と呼べるものはなにも備わっていない。
(身代わりがばれたらどうなることか……)
まさに一巻の終わりだ。騙されそうになったとわかれば、きっと相手はこの家を破産まで追い込むに違いない。

(お父様が借金のことをバーバラ夫人にお話しくだされば、まだ違うかもしれない……ああ、でも奥様のことだから、貴族が成金に借金をすることのどこが罪なのかと、逆に開き直りかねないものね)
どうにも八方塞がりである。
マリエンヌは、もう何度目になるかわからない重たいため息をついた。
「……それにしても、ずいぶん遅いわね。約束の時間は過ぎているのに」
相手が早くくることを想定して、マリエンヌはすでにかなりの時間、この席に腰かけている。
パラソルの下にいるから日焼けこそしないが、コルセットに締めつけられているせいか、暑さがいつにも増して厳しく感じられた。
じっと座っていられる心境でもなく、マリエンヌはとうとう立ち上がった。
庭では連日、多くの薔薇が競うように美しい花弁を開かせている。その凛とした姿を見れば気も晴れるだろうと、ゆったり歩き始めた彼女は、ほどなく一輪の美しい白薔薇の前で足を止めた。
「まあ、一輪挿しにちょうどいいわ」
上を向いて花開くその薔薇は、花びらの枚数といい形といい、申し分のない美しさだった。
何枚かの葉とともに手折って、細い花瓶に挿して飾ったらどうだろう?
(緊張するお茶の時間も、少しは気持ちがほぐれるかもしれない)
マリエンヌは自然と笑みを浮かべながら、そっと花びらの下へと手を滑り込ませた。
「痛っ!」

指先に痛みを覚えたマリエンヌは慌てて手を引き抜く。
葉陰に潜んでいた棘に指をひっかけてしまったのだろう。人差し指の腹の部分に、じわじわと赤い染みが広がっていった。
白い手袋を染めていく鮮血に、マリエンヌは「大変！」と血相を変える。
（この手袋もマーガレットのものなのに！　ああ、穴まで開いてしまったわ……っ）
迂闊な自分に歯がみしながら手袋から指を引き抜いたマリエンヌは、泣きそうになってしまった。
「どうしよう……」
途方に暮れたそのときだ。
いきなり視界の端に大きな手が現れたかと思うと、剥き出しになったマリエンヌの手を掴む。
「え？」
そのままぐいっと手を引っ張られ、マリエンヌは思わず振り返った。
「なっ――」
勢い余って帽子が落ちる。ヴェールも一緒に取り払われ、それまで陰っていた視界が一気に広く明るくなった。
入り込む日差しに目を細めたのは一瞬。
次の瞬間、マリエンヌは大きな瞳をさらにいっぱいに見開いていた。
「誰――っ？」
そこにいたのは、見上げるほどに背が高く、そして驚くほど美しい顔立ちをした紳士だった。

あまりに唐突な登場に、マリエンヌは息を呑む。
――いったいいつからそこにいたのだろう……？
呆然としていると、男の肉厚の舌が、官能的な唇からわずかにのぞいた。
その仕草にどきりとしたマリエンヌは、男の舌が自分の指先に押しつけられるのを感じ、小さく悲鳴を上げる。
温かな舌が、血の滲む指をぺろりと舐める。それどころか、まるで咥え込むように指先を吸い上げられ、痛みとも痺れともつかない不思議な感覚に襲われたマリエンヌは、腰をぶるりと震わせた。
「い、いや……っ」
慌てて手を引っ込め、胸元に抱え込む。
そのまま後ずさると、男はわずかに口角を引き上げた。それも片方だけ。皮肉めいた笑みだが、それがなぜかとてもよく似合う。
マリエンヌは声も出せないまま、じっと男の姿を見つめた。
（なんて……なんて、素敵なひと）
年齢はマリエンヌよりずっと上だろう。しかしすっと通った鼻筋や、頬から顎にかけてのラインは男らしく、力強さが垣間見える。なのに肉厚の唇や襟元からのぞく喉仏は信じられないほど官能的で、男性なのに『色っぽい』という表現がぴたりと当てはまった。
なにより美しいのは、銀色にも見える灰色の瞳。
髪と同じ色の長い睫毛が影を落としているのに、眼光の強さは少しも揺らぐことがない。

しっかりと整えられた黒髪からわずかに前髪がこぼれていて、マリエンヌは無意識に、こくりと喉を鳴らしてしまった。
知らず、頭の奥がぼうっとして、身体がふわふわと浮いているような気分になる。
胸の動悸だけが、駆け足になっていく。
相手もまた、そんなマリエンヌをじっと見つめている。
どれくらいそうしていたか……不意に、彼は紳士らしく目礼してきた。
「失礼。突然の無礼をお許しください、レディ」
――レディ。
一度として呼ばれたことがない伯爵令嬢としての敬称に、マリエンヌはハッと我に返った。
「い、いえ、こちらこそ不作法を……」
慌てて頭を下げたマリエンヌは、そこでようやく帽子がなくなっていることに気がついた。
（い、いけない。瞳の色に気づかれてしまう！）
マリエンヌの瞳は深い琥珀色だが、マーガレットは明るい緑色だ。姿形は似せられても、こればかりは誤魔化しようがない。
マリエンヌは慌てて足下に目を落とす。幸い、帽子はすぐ近くの茂みに引っかかっていた。
ほっとして手を伸ばすが、先に紳士がひょいと帽子を取り上げてしまう。
「あ……」
「失礼」

彼は自然な仕草でマリエンヌの頭に帽子を乗せ、ヴェールを見栄えよく直してくれた。
「あ……ありがとう、ございます……」
離れる一瞬、彼の指先が耳たぶをかすめて、マリエンヌは声を上げそうになってしまう。
しかし紳士は笑みを深め、改めてマリエンヌの手を取った。
「ご挨拶が遅れました。わたしはアルフレッド・ロークス。あなたの求婚者です」
マリエンヌは目を見張る。噂の不動産王がこれほど美しいひとだったなんて……
「あ……ま、マーガレットと申します。はじめまして……」
貴婦人としての挨拶の仕方は一応教えられたが、身体が強ばってしまってうまくいかない。
なんとか少しだけ膝を曲げると、アルフレッド・ロークスは再びシニカルな笑みを浮かべた。
「なに、傷はさほど深くはない。こうして縛っておけばすぐに血も止まるだろう」
ロークスは懐からハンカチを取り出すと、それを手早くマリエンヌの指先に巻きつけた。
「あ、ありがとう……」
マリエンヌは指先を胸元に抱え込む。心臓が先ほどよりもさらに速い鼓動を刻んでいた。
彼女が緊張していることに気づいてか、ロークスはそっと腕を差しだしてくる。
「もしよろしければ、庭を案内していただきたいのだが。リード伯爵邸の薔薇園はそれは素晴らしいと聞いている」
「！　――はい、それなら喜んで」
マリエンヌは安堵し、やっと微笑むことができた。

リード伯爵邸の薔薇園は、王宮でも評判の素晴らしさを誇っている。
数代前の奥方が無類の薔薇好きで、当主は彼女のために大枚をはたいて庭を改造したそうだ。かつては王太子夫妻を招いてパーティーを開いたこともあるという。
マリエンヌもこの薔薇園が大好きだった。奥には東屋もあるし、今は壊れているが噴水もある。小さい頃は使用人の子供たちと一緒に、かくれんぼをして遊んだものだ。
時折バーバラ夫人に見咎められて、厳しいお仕置きを受けることもあったけれど……
「この薔薇は他国で開発された新種なんです。商船が海を越えて運んできたもので、この庭以外には、王宮にしか植えられていないとか」
「ではとても貴重なものなのだな。一口に薔薇と言っても奥深いものだ。ほんの少しの色の違いや花びらの違いで、実に多くの種類に分けられてしまうのだから」
「本当に。でもどの薔薇もそれぞれに魅力があって、とても素敵です」
足が向くまま薔薇園を歩きながら、マリエンヌは心が浮き立つのを感じる。
自分の好きなものを彼に知ってもらえるのがとにかく嬉しい。彼が実に興味深い様子で薔薇を見つめているから、なおのことである。
おそらくテラスでお茶を飲んでいただけなら、すぐに話題が尽きて困り果てていたことだろう。けれど薔薇のことなら、庭師と親しいマリエンヌは一日中でも語っていられる。
なにより、薔薇の中を歩くロークスの姿は、一幅の絵のように美しかった。
（わたしの歩調に合わせてくださるし、汚れるのも構わずハンカチを巻いてくださった……。いろいろ噂されているけれど、本当はとても優しい方なのかもしれないわ）
その発見が、なぜか嬉しくて仕方がない。
こうして横顔を見ているだけでもどきどきして、マリエンヌは何度も、自分の頬が赤くなっていないかを確かめなければならなかった。
（けれど、この方はどうしてマーガレットと結婚を……？　いくら爵位を持たないとはいえ、この美貌でお金持ちなのだもの。恋い焦がれる女性は多いでしょうに）
なぜ「成金との結婚なんていやっ！」と泣き喚くようなマーガレットを花嫁にしたいのだろうか？　そんなことを考えていると、不意にロークスの視線が薔薇からマリエンヌに移る。
ヴェール越しとはいえばっちり目が合い、マリエンヌの心臓はどきんと高鳴った。
「あ、あの……なにか？」
「いや……以前夜会で見かけたときと今とでは、あなたの印象がずいぶん違って見えたものだから」
――！　マリエンヌの胸が、先ほどとは別の意味で跳ね上がった。
「ま、まあ……違うって、どんなところがですか？」
「今日のあなたは、とても優しげで清楚な令嬢に見える。夜会でのあなたは華やかで、居並ぶ男たちを喜んで従えていたから、よけいに不思議に思えてね」
「……」
背中を冷や汗が伝うのを感じる。

まさか妹が、邸の外でも女王様然と振る舞っているとは思いもよらなかった。『男たちを従えていた』なんていったいどんな状況なのか想像もつかないが、あの妹ならやりかねない。
（と、とにかく、なんとか誤魔化さないと）
さすがに今から傲慢に振る舞うのはおかしいだろうと判断したマリエンヌは、さらりととぼけることにした。
「その、今日はそんなことをする気分ではないんですの。……薔薇に囲まれているせいか、とても穏やかな気持ちでおりますし」
「――なるほど。夜と昼では、確かに気の持ちようは変わってくる。どうやらあなたには、夜には夜の、昼には昼の顔があるようだ」
「え、ええ」
納得してもらえたのだろうか？
上目遣いで確かめると、ロークスはなぜか例のシニカルな笑みを浮かべていた。
「ということは……夜にねだるべきことを、昼にねだるのは自重したほうがいいということか？」
「え……？」
ねだる……？　首を傾げるマリエンヌに、ロークスは内緒話をするように身をかがめてきた。
「先日、あなたはさる侯爵家の嫡男に口づけを与えていらっしゃいましたよね？」
（く、口づけっ？）
目を見開くマリエンヌとは対照的に、ロークスは楽しげに目を細めた。

「覚えておられませんか？　それとも彼は、あなたのたくさんいる恋人たちのひとりに過ぎなかったのかな？　唇を与えた相手の顔など、いちいち覚えていないとでも？」
（えええ……っ？）
マリエンヌは真っ青になってしまう。
妹が口づけを済ませている事実も驚きなら、恋人がたくさんいるというのも信じがたいことである。
（と、というより、この方さっき、ねだるって……！）
なんとなく身の危険を感じ、マリエンヌは慌ててロークスから距離を取った。
「――なるほど。昼のあなたは貞淑なのか。昼と夜の顔が違うのもまた一興だ」
灰色の瞳にきらりと不思議な光が宿る。
直後、マリエンヌの肌がぞっと粟立った。よくわからないが、このままでは危険だと本能的に感じる。
（一緒にいてはいけない――）
マリエンヌはとっさに、ドレスの裾を持ち上げて、薔薇の茂みをかきわけるように奥へと走り出した。
だが男の長い足で追いかけられては逃げ切ることなど到底できず――蔓薔薇で囲まれた東屋が見えたところで、とうとう捕まえられてしまう。
「わざわざ人気のないところに逃げるとは。やはり、飢えていたのか？」

「は、離して……っ」
マリエンヌは必死に身をよじるが、体格差がありすぎる。
あっという間に東屋の円柱に背を押しつけられ、顎をきつく掴まれた。
「逃がさない――」
彼の吐息が唇にかかる。
肉厚の唇と柱のあいだで押しつぶされながらも、マリエンヌは恐怖ではなく別の衝動で震えてしまった。
「んぅ――……っ！」
かぶせるように唇を重ねられ、マリエンヌは白い喉を反らしてきつく目をつむる。
押しつけられた彼の唇はあまりに熱く、見た目よりずっと柔らかかった。
抵抗しなければいけないのに、手足は震えるばかりでうまく力が入らない。
それどころか角度を変えて何度も口づけられるうちに、ひとりで立っていることも難しくなってきた。
「んっ……！　や、やめ……っ」
なんとか顔を逸らし声を漏らすも、その隙をついて温かな舌をねじ込まれてしまう。
口の中で自分以外のものがうごめく感覚に、マリエンヌの身体は火を入れられたように熱くなる。
「はふ……、んっ、ん……っ」
身をよじろうとすると、抵抗するなとばかりにきつく抱き寄せられる。

背中は柱に、胸から腿まではぴたりとロークスに合わさり、衣服越しに感じるぬくもりに頭の芯がくらくらした。
「ん……、ふ、ぅ……っ」
くちゅくちゅと濡れた音が口元から立つ。
思わず息を止めると、ロークスはわずかに顔を上げて、唇は合わせたまま囁いた。
「呼吸を止めるな。鼻で息をするんだ」
「ぅんん……っ」
深呼吸する間もなく、再び舌がねじ込まれる。
熱くぬめる舌はマリエンヌの口内を自在に駆け回る。歯列の裏や頬の柔らかいところを突いたり舐めたりと忙しい。
不思議なことに、そうされると身体の奥底が疼くように震えて、気づけばマリエンヌは彼の腕にしがみついていた。
(だめっ。抱きつくなんていけないわ。突き飛ばさなくちゃ……っ)
唇同士の口づけは特別なもの。そんなことは子供でも知っている。
こんなふうに一方的に奪われていいはずがないのに――
(なのに……どうして、少しもいやじゃないの……？)
いけないことなのに、彼の舌がマリエンヌの舌を探り当て、舌先同士が絡まり合った途端に、はねのけなければという理性も吹き飛んでしまった。

「んンっ……、はっ、…んん……っ」
狭い口の中では、逃げようとしてもすぐに絡め取られてしまう。
もうなにも考えられなくなり、マリエンヌはひたすら彼から与えられる口づけを受け止めた。
しまいには足腰が砕けそうになって、気まで遠くなってくる。
だが彼の大きな掌が顎から離れ、首筋をたどって胸にたどり着いたとき、マリエンヌはハッと我に返った。
「い、いやっ！」
慌てて彼の胸を押し返すも、力はほとんど入らない。
ロークスはゆっくり顔を上げた。
しっかり撫でつけられていた髪がはらりと目元に落ちてくる。長い口づけで少し腫れた唇を、彼は舌先でぺろりと舐めた。
その仕草を見たマリエンヌは、自分の唇が舐め取られたような錯覚を覚えてしまう。ぞくぞくする疼きが這い上がり、マリエンヌは慌てて顔を逸らした。
助けを求めなければ……そう思いつつも、火照った身体は少しも言うことを聞いてくれない。
そうこうするうち、不敵な笑みを浮かべたロークスは、そっとその場にかがみ込む。
「な、なにを……」
崩れ落ちそうになったマリエンヌはとっさに彼の肩に手をつく。
そんな彼女を一度上目遣いに見上げ、ロークスは彼女のドレスの裾に、そっと手をかけた。

「いやっ、なに……？　あ、いやぁっ！」
マリエンヌは驚愕のあまり目を見開く。
風が無慈悲に足下を撫でる。ロークスはあろうことか、足下を覆っていたドレスのスカートを大胆にまくり上げてしまったのだ。
ペチコートと、下着として着ていた丈の長いシュミーズをまとめて持ち上げられ、絹の靴下に包まれた細い足が日の光に晒されてしまう。マリエンヌはドロワーズを身に着けていなかった。さらにその上の腰回りには、靴下を止めるガーターベルトしか身に着けていない。
女性として隠すべき秘密の場所が、ロークスの手によってたちまち露わにされてしまった。
「やめてっ。お、お願い、離して……！」
羞恥のあまり涙を浮かべながら、マリエンヌは必死に裾を下ろそうとする。
そんな努力もむなしく、ロークスは彼女の足のあいだを見上げて小さな笑みをこぼした。
「なるほど。夜のように薄暗く隠された場所は、やはり奔放というわけか」
「いやぁ！」
足のあいだをなにかがかすめ、マリエンヌは柱に頭を押しつける形でのけぞった。
撫でるようにふれてくるのが彼の指だとわかって、マリエンヌの中に初めて恐怖が兆した。
これは許してはいけないことだ――知識はなくても、本能的にそう悟り、全身が小刻みに震えてしまう。
「だめ、見ないで……、お願い……っ」

「本当にそう思っているのか？」
「ひっ！」
指先が再び足のあいだを撫でていく。そのとき、ぴちゃりというかすかな水音が響いて、マリエンヌはわけがわからぬまま真っ赤になった。
「は、ぁ……っ！」
「わかるか？　口づけただけで、これほど濡れる女など見たことがない。やはり噂通り、淫乱な娘のようだ」
「うっ……」
マリエンヌは、くしゃりと顔を歪める。そんなふうに言われるなんて……！
「そう泣くな。よくしてやる。美しい庭園を案内してくれた礼だ――」
「えっ……？　あっ、い、いや！　やめて！　やめてぇええ！」
ロークスの身体が伸び上がるように秘所に近づき、マリエンヌは首をうち振って懇願する。
弾みで帽子が落ち、結わえていた髪も解けてしまうが、もはやそんなことを気にする余裕もなかった。
「いやぁああ……！」
太腿の裏に手がかけられ、力強く持ち上げられる。片膝が胸につくほど折り曲げられ、マリエンヌは男の目に、秘められた箇所をすべて晒してしまっていた。
マリエンヌからは見えなかったが、そこは朝露を含んだ薔薇のようにしっとりと濡れ、日の光を

浴びて輝いている。
呼吸のたびに蜜口が震えるのがたとえようもなく淫靡なのだが、マリエンヌ自身は恥ずかしさのあまり、まともに息もできなかった。
「美しいな」
不意に、ロークスが囁くように呟いた。
唇を噛みしめうつむいていたマリエンヌは、場違いな言葉にわずかに顔を上げる。
彼の視線は変わらずマリエンヌの秘所に注がれたままだ。
彼の言う「美しい」というのがその部分を指していることに気づき、マリエンヌは大きく息を呑む。
するとどうしたことか――恐怖に支配されていた心がたちまち緩み、顔が徐々に火照ってくる。動悸が速くなり、口内に唾液が溜まって、マリエンヌはごくりと喉を鳴らしてしまった。
様子が変わったことに気づいてか、ロークスもわずかに目を上げる。
灰色の瞳がかすかに細められたとき、マリエンヌの心臓はどくんと大きな音を立てて、全身の血をカッと熱く燃え上がらせた。
「あっ……」
その瞬間、マリエンヌは足のあいだにとろりとした感触を覚える。
割れ目から溢れたそれが、つう……と太腿へしたたるのを感じ、目の前が真っ赤に染まったような気がした。

「ほう。見られて感じたのか」
ロークスの笑みが深くなる。
再び涙ぐんだマリエンヌは、身をよじって彼の手から逃れようとした。
「いやっ、もう離して……、もうやめて……っ！」
「やめられるものか」
ロークスは持ち上げたマリエンヌの足を自分の肩にかけ、ドレスの裾ごと、両手で彼女の腰を掴む。
がっちりと固定されたマリエンヌは動くに動けない。だがロークスの顔が徐々に秘所に近づいていくのを目の当たりにしては、大人しくしていろと言うほうが無理だった。
「いや！　離して。なにを……っ、……あ、ぁぁああああっ！」
突如立ち上った甘い愉悦に、マリエンヌは喉を反らして悲鳴を上げた。
熱い吐息が、蜜まみれの秘所にかかる。
同じくらいに熱い舌が、割れ目の少し上のほう――快楽の芽をねっとりと舐め上げてくるのを感じ、マリエンヌはがくがくと全身を震わせた。
「い、いやっ。それ、だめ……、あっ、あぁっ、……いやぁぁあ……っ！」
ぴちゃぴちゃと音がするほど舐め上げられ、マリエンヌは声を上げる。
信じられないほどの愉悦がふれたところから立ち上り、下腹の奥を熱く震わせ、全身をびくびくと引き攣らせた。

こんな感覚は知らない。
今にも崩れ落ちそうなのに、どこかに飛んでいきそうになるなんて――
「いやぁ、だめ……っ！　あっ、ひぁっ！　あぁぁあ……っ！」
続けざまに舐められ、吸われ、撫で回される。
痛みはないが、代わりにうねるような快感が全身を這い回り、思考を鈍らせ、身体を熱く震わせた。
気持ち悪いのに、気持ちいい。下手をすればもっと強くと叫びそうになってしまう。
マリエンヌはすがりつくものを求めて、気づけば彼の頭を抱え込んでいた。
柱に背を押しつけ、胸を反らしてのけぞりながら、ぎゅっと彼の髪を掴んでしまう。
それを抵抗と見てか、ロークスはさらに激しく舌をうごめかせてきた。片方の指を腰から滑らせ、割れ目の入り口をくすぐるように撫でてくる。
「いやぁあ、だ、め……！　で、でちゃうっ、お願い、でちゃうのぉ……っ！」
尿意に似た疼きが快感とともにせり上がってきて、マリエンヌは首をうち振って懇願する。
しかし、すがりつく両手はますます彼の頭を引き寄せ、もっともっとと暗に伝えていた。
（あぁ、だめ！　早く離さなくちゃ……でも、もう少しで……！）
理性とは裏腹に、身体は貪欲に求めてしまう。
こんなところで粗相してしまうわけにはいかないのに。まして彼がそこに顔を埋めている中で……！

「ひっ、ひぅ……、あっ、あぁぁ、だめぇええ……！」
（もうだめ。我慢……できない……！）
涙に濡れた視界に、柱に絡まる蔓薔薇がぼんやり映り込んでくる。
もし今、あの柱の陰から誰かがのぞいてきたら。
薔薇の陰に隠れて、ふたりの痴態に驚愕の表情を浮かべていたなら……
恐ろしい想像に、背徳感がせり上がってくる。
なのに、その思いは恐怖ではなく、身体中に渦巻く疼きをさらに加速させてしまった。
快感が限界まで高まっていく。
次の瞬間、ロークスの唇が快楽の芽を挟み込み、じゅっと音がするほど強く強く吸い上げてきた。
頭の中が真っ白になり、意識も理性も弾け飛ぶ。
「い、や……っ、あぁぁぁあ……っ!!」
快感のうねりが下腹を震わせ、脳髄までをも溶かしていく。
全身が強ばり、ロークスの肩にかけられた足先がきゅうっときつく丸まった。
視界がちかちかと明滅していく。
蔓薔薇のひとつひとつがまるでこちらを注視しているような気がして、マリエンヌは見られているという感覚を覚えると同時に、さらなる蜜を秘所から溢れさせていた……

――気づいたときにはもう夜で、メイド頭のローラが心配そうに枕元をのぞき込んでいた。

「よかったですわ、お気づきになって。今お食事をお持ちしますからね」
マリエンヌが横にさせられていたのは、屋根裏ではなく客間のひとつだった。
どうも薔薇園で気を失ったマリエンヌを、ロークスがここまで運んでくれたらしい。
『暖かい日なのに長く日なたにいたものですから、目眩を起こされたのでしょう。こちらの不注意でお嬢様を倒れさせたようで申し訳ない』
薔薇に魅了されたあまり、つい時間を忘れて……と謝罪したロークスに対し、父リード伯爵は何度も何度も頭を下げて、娘の不作法を謝ったという。
（平然とそんな嘘を言うなんて……わたしが倒れたのはあの方のせいなのに）
東屋でのふれあいを思い出し、マリエンヌはたちまち真っ赤になる。
ふれあい、などという可愛いものではなかった。まだ日も高いうちから、あんなところであんなことをするなんて信じられない。
マリエンヌには同世代の友人というのがほぼ皆無だ。そのため思春期を迎えても男女の秘め事について知る機会はほとんどなかった。使用人たちの日常の会話から、深い仲になった男女が抱き合うという認識くらいはあったが、その具体的なことなどまるで知らなかったのだ。
だがもっと信じられないのは、彼のそんな無礼に、自分が快感すら覚えてしまったという事実だ。
あんな感覚ははじめてだったというのに、限界まで昇りつめてしまうなんて。
本来なら嫌悪するべきところなのに、なぜか彼の息づかいや舌先を思い出すだけで、身体の奥がむずむずと熱く震えて仕方がない。

「お嬢様？　どうかなさったのですか？」
「えっ。い、いいえっ。なんでもないのよ」
マリエンヌは慌ててローラから食事のトレイを受け取る。
母親代わりでもある彼女を安心させるべく、食欲はなかったがパンを頬張った。
「お嬢様、決してご無理はなさらないでくださいね。つらいことがあったらすぐにこのローラに言うんですよ？」
「ええ、わかっているわ。食事をありがとう。もう部屋に戻って休むわ」
屋根裏にある自分の部屋に戻ると、マリエンヌはため息をついてベッドに倒れ込む。
薄暗く肌寒い屋根裏部屋だというのに、身体に渦巻く熱はちっとも引いていかない。
彼がふれた唇を無意識のうちに撫でながら、マリエンヌはアルフレッド・ロークスのシニカルな笑顔を思い返していた。
結局、彼はマリエンヌが身代わりであることに気づかず帰っていったようだ。もし気づかれていたなら、こんな時間まで客間で休むことなどできなかったに違いない。
ということは、彼はこのまま結婚話を進めてしまうだろう。
（一応、わたしはやるべきことをやり遂げることができたのよね……？）
マリエンヌの心中はとても穏やかとは言えなかったが、少なくとも伯爵家が破産に追い込まれる危機からは脱出できたようだ。
（よかった、と喜ぶべきなのに……）

実際に結婚するのは自分ではなく、マーガレットだと思うと、胸がじくじくと疼くような、苦しい気持ちに駆られてしまう。
頭の中に、マーガレットとロークスが舌を絡ませ合う図が浮かんできて、すっと手足が冷えた。
あまりのことに息をのみ、思わず暗闇の中で目を見開いて硬直してしまうが――
（……だ、だからどうだというの。あの方と結婚するのはマーガレットよ。最初からわかっていたはずでしょう？）
第一、会っていきなり口づけてくるばかりか、それ以上のことにまで及ぶような無礼なひとに、どうしてこんなに心を掻き乱されなければならないのか。
彼が別の女性とそういうことをするのを想像して、どうして胸を痛めなければならないのか……わからない。
なのに、気づけばぽろぽろと涙がこぼれてきて、マリエンヌはそんな自分にひどく戸惑った。
（どうして……っ）
慌てて目元をぬぐうが、涙はひっきりなしに溢れてきて、枕を熱く濡らしてしまう。
瞼を閉じるといやでもロークスの顔が浮かんで、息をするのも苦しいほどに胸の奥が痛くなった。
（……考えてはだめよ、マリエンヌ。もう寝るの。明日からはまたメイドとしての仕事が待ってる。泣いている暇なんてないのだから……）
明日になれば変わらない日常が待っている。
なんの楽しみもない、労働をするばかりの毎日。

つらい代わりに、こんなふうに心を痛める出来事もないのだ。
それが無性に悲しくて、マリエンヌは枕に顔を埋め、小さく嗚咽を漏らした。

†

しかし、事態はまたしても思いがけぬ方向へ転がった。
当初のロークスの申し出は、結婚式は三ヶ月後――結婚の申請がきちんと受理されてから、というものだった。
しかし彼は教会に申し出、結婚の特別許可証をすでに発行させてしまったらしい。
そのため結婚式は一週間後となり、準備のためすぐにでもマーガレットを寄越すようにと、ロークスから使いがやってきた。しかし突然だったこともあり、使者は数刻後に出直してくることになった。
当然の如く、マーガレットは全身全霊でこれを拒絶した。
「いやよ！　いや、いや、いやっ！　どうしてわたしがあんな成金に嫁がなくてはいけないの！　お父様はわたしを成金に売り払うつもりなの!?」
「まったくです！　なぜ唯々諾々と使いの者に輿入れの返事をしてしまったのですか!?」
やはり伯爵は、ロークスに借金があることを妻と娘に話していないようだ。
原因の半分は妻と娘の浪費とはいえ、それを正直に言えば伯爵自身が責められることは目に見えている。もとはといえば伯爵に甲斐性がないから、という具合にだ。
しかし伯爵も引くには引けない。とうとう涙まで流し始めた伯爵に、夫人とマーガレットは気圧されたように後ずさった。
「頼む。マーガレット、後生だ。頼むから、ロークスのところへ嫁いでおくれ……っ」
「いやったらいや！　――そうよ、またマリエンヌに身代わりをさせればいいのよ！」
マーガレットが、はらはらしながらやりとりを見ていたマリエンヌに指を突きつけた。
「この前はそれでうまくいったんでしょ？　そうよ、結婚が早まったのは、きっとこの女が立場もわきまえずに成金を誘惑したからなんだわ。そうなんでしょうっ？」
「そ、そんな」
マリエンヌは首を横に振るが、マーガレットの主張にバーバラ夫人は大きく頷いた。
「確かにその通りね！　成金に愛人の娘――ほほほっ！　きっと卑しい者同士、話が合ったのでしょうね。なんてお似合いだこと！」
痛烈に言い放つバーバラ夫人に、マリエンヌの胸はひどく痛む。
だがそれは自分が愛人の娘と呼ばれたからではなかった。
（ロークス様は他の貴族たちからも、こんなふうに悪く言われているのかしら……）
確かによくない噂ばかりの成金かもしれないが、実際のアルフレッド・ロークスは美しい容姿をした紳士だった。
最終的に紳士らしからぬことを仕掛けてはきたが、熱心に薔薇を見つめていた視線はマリエンヌ

の胸を絡め取って離さない。棘でできた傷を舐めてくれたときの優しい仕草など、未だに夢に出てくるくらいである。
間違っても、そんなふうに貶められていい人間ではないはず。
（彼のもとに、マーガレットの身代わりとして、わたしが嫁ぐ――？）
とっさに想像をふくらませたマリエンヌは、例のぞくぞくするような疼きを身体の奥底に感じて戸惑ってしまう。あんな恥ずかしい思いは二度としたくない。なのにこの数日、彼のあのシニカルな笑みを思い出すたび、マリエンヌはなぜか同じ症状に悩まされていた。
「さあさあ、そうと決まったら早く支度をするのです！　ローラ！　さっさとこの娘を連れてお行き！」
「し、しかし奥様っ」
「バーバラ、待て。マリエンヌは……っ」
「ああもう、言うとおりにしてくださいな‼　これ以上この件であたくしたちを煩わせるのは、やめてくださいまし！」
バーバラ夫人はきっぱりと言い捨て、自分の部屋に向かって歩き出した。
マーガレットもそのあとを追いかけていくが、部屋を出る際、マリエンヌに嘲りの笑みを向けることは忘れなかった。
「ま、待てっ、バーバラ……っ」
伯爵もおたおたしながらふたりのあとを追いかける。

取り残されたマリエンヌとローラ、それに禿げ頭の家令は、一様に重苦しいため息を漏らしてしまった。
「……お嬢様……」
どうしたものかと振り返る家令に、マリエンヌは暗い顔のまま口を開いた。
「とにかく……ドレスを用意しましょう。ローラ、手伝ってちょうだい」
「お嬢様、まさかご自分が成金のもとへ嫁ぐおつもりではないでしょうね？」
ローラも家令も驚いた顔を向けてくる。
部屋を出ながら、マリエンヌは小さく首を振った。
「用意するのはマーガレットが着ていくドレスよ。荷造りもしないと……使いの方が戻ってくるまでには、お父様もマーガレットを説得なさるはずだわ」
マリエンヌはローラと協力し、手早くマーガレットの旅装を整えていく。
隣の部屋からはマーガレットの泣き喚く声と、バーバラ夫人の金切り声がひっきりなしに響いていた。
結局マーガレットを説き伏せる前にロークス邸から使者が再びやってきてしまい、マリエンヌは大急ぎでドレスに着替えることになった。
「すまない……マリエンヌ、本当にすまない……」
「もう泣かないで、お父様。わたしは大丈夫だから」

年甲斐もなくすすり泣く父の肩をそっと撫で、マーガレットのドレスに身を包んだマリエンヌは微笑んで見せた。
部屋に再び戻ってきたバーバラ夫人が、マリエンヌを射殺すような目で見つめながら口を酸っぱくして言う。
「いいこと？　もし身代わりがばれて戻ってくるようなことになったら……ここの使用人をひとり残らず馘首にして、路頭に迷わせてやるからね！」
幼い頃から使用人として働いていたマリエンヌにとっては、ローラたちこそ大切にすべき家族だった。
その家族がみすみす職を失うようなことはさせたくない。
そうでなくても、身代わりのことが知られれば、この伯爵家は一巻の終わりだ。
マリエンヌは幸か不幸か、そのことを重々承知していた。
「必ず、必ず、結婚式の日までにはマーガレットをそちらに行かせる。それまで……」
「わかっているわ、お父様。わたしは大丈夫だから」
式の日までは一週間ある。邸で必要なのは式の準備であり、仕事の鬼と言われているロークス様と接触することもそうないだろう。なんとかばれないように努めなくては……そう思いながらマリエンヌは何度も「大丈夫」と繰り返し、古い鞄を手に邸の外へ出た。
鞄はローラからもらったお下がりで、中には替えの下着と簡素なワンピースだけが入っている。
先方に身ひとつで構わないと言われていたので、それに甘えることにしたのだ。

マーガレットだったら、たとえそう言われてもお気に入りのドレスや靴をごっそり持っていくだろう。だがマリエンヌにはそもそも荷物などほとんどなかった。
そうして本当に身ひとつで邸を出るマリエンヌを、使用人たちは涙を流して見送ってくれた。
「ああ、お嬢様。なんとお気の毒な……」
「泣かないでローラ。ほんの数日のことよ。すぐに戻ってくるわ」
使用人たちを心配させないため、マリエンヌはあえて明るく笑って見せる。
ロークス商会の紋章が入った馬車に乗り込み、邸が見えなくなるまで、マリエンヌは笑って見送りの人々に手を振り続けた。
だが、馬車が曲がり、馥郁たる薔薇の香りが遠ざかったとき、こらえていた涙がこぼれそうになり唇を噛みしめる。
（悲しむことなんてなにもないわ。数日すればまた戻ってくるのだから……）
そう自らに言い聞かせていると、向かいに座ったロークスの使者が、にっこり微笑みかけてきた。
「マーガレット様は、邸の使用人に大変慕われていたようですね」
慌てて目元を擦りながら、マリエンヌは小さく頷いた。
「その……みんなとてもよくしてくれたから」
「違いますね」
マリエンヌは驚いて顔を上げる。
すると使者の少年は悪戯っぽく片目をつむって見せた。

「逆ですよ、マーガレット様。あなたがみなによくしてあげたから、使用人たちもあなたとの別れを惜しんでいるんです。どうやらあなたは噂と違い、寛大で思いやり深い方のようですね」
「……」
マリエンヌは、じっと相手の顔を見つめてしまった。
「これは失礼。僕はロークス氏の従者でリチャードと申します。どうぞお見知りおきを」
「……従者？」
それにしてはずいぶん若い。
おまけに異国の血も混ざっているようで、その肌の色はいくぶん浅黒かった。
「母が南方の生まれなもので。もっとも、両親はとうに死んでいますが」
「まあ……」
「旦那様からも注意されるんですが、遠慮のない性格はもう矯正しようがないので、お気に障ったときは遠慮なく仰ってください。言い方は気をつけますので」
あっけらかんと言い放つ少年に、マリエンヌは不覚にも笑ってしまった。
「馬車はこれからロークス邸へと向かいます。マーガレット様のご実家からは少し離れたところにございまして、到着するのと日が落ちるの、どちらが早いかは微妙でございます」
「郊外にあるの？」
「はい。けれど少し下れば街もあって、なかなか過ごしやすい場所ですから」
リード伯爵邸は他の貴族たちの家同様、高級住宅街の一角に設けられていたが、ロークスが普段

生活を送る家はそことは離れたところにあるらしい。
人嫌いだったり、第一線を退いたりして隠遁生活を送る貴族は、あえてそういったところに家を構えるものだと聞いたことがある。ロークスも都会の喧噪を避け、空気のよい郊外に自宅を構えることを選んだのだろうか。
「ちょっと慌ただしいんですが、邸に着いたらすぐに着替えていただきます。少し遅い時間になりますが、旦那様も今日は邸に戻ってきますので、晩餐をご一緒なさってください」
「旦那様……」
ロークスの笑みが頭に浮かぶと、マリエンヌはたちまち落ち着かない気持ちになってしまった。
「その、ロークス様は、おうちに戻らない日も多いのかしら？」
「むしろそういう日がほとんどですね。会社にも寝床はありますし。あのひとは仕事の虫というか、鬼というか、とにかくそういうひとなんで、常に自分が現場にいないと落ち着かないきらいがあるんですよ」
「まあ、そうなの……」
（それでは休暇を取る暇もないのかしら？　身体を壊してしまわないか心配だわ）
家に戻ることが少ない、というのは今のマリエンヌにとっては幸いなことだ。そのぶん身代わりが発覚する可能性が減ることに繋がるのだから。だがその相手が仕事ばかりの毎日を送っていると思うと、やはり無関心ではいられなかった。
その後も馬車は休むことなく走り続けた。

リチャードの気取らない話しぶりに聞き入ったおかげか、たいした疲れを感じることもなく目的地に到着する。

「さ、長時間お疲れ様でした。ここがロークス氏のお邸です」

ここが、と言いながら馬車はまだ止まらない。リチャードは窓を覆っていたカーテンをさっと開けた。

夕暮れに染まる丘が視界いっぱいに広がる。マリエンヌは「まあ！」と大きな声をあげた。

ロークス邸は丘の上に建てられていた。なだらかな丘には多くの木々が生い茂り、たくさんの花が咲いている。邸はそんな木々に埋もれていてもはっきりわかるほど大きく、夕日の照り返しできらきらと橙色に輝いていた。

馬車は入り口までの一本道を軽快に走っていき、やがて噴水が備えられた門のところでゆっくりと停車する。

馬車が入ってきた気配を感じ取ってか、邸の玄関が左右に大きく開け放たれた。

使用人によって緋の絨毯が玄関から馬車まで広げられる。お仕着せを着込んだ男女の使用人がぞろぞろと出てきて、等間隔に綺麗に並んだ。

「ようこそ、ロークス邸へ」

「さあ、お手をどうぞ。お嬢様」

リチャードに促され、マリエンヌはどぎまぎしながら馬車を降りる。

緋の絨毯は靴越しにもわかるほど柔らかかった。

一歩踏み出すごとに、左右の使用人が頭を下げて迎える。伯爵邸よりずっと豪勢な出迎えに、マリエンヌは圧倒されるばかりだった。

邸の内部は一層豪華だ。広い吹き抜けのガラス天井からは、夕日が痛いくらいに降り注ぎ、大理石の床を眩しく照らし上げている。

壁際には装飾用の壺や鎧が並び、階段はぴかぴかに磨き上げられ、ひときわ目につく花瓶には、薔薇がこれでもかというほど活けられていた。

「お嬢様、ご紹介いたします。こちらがこの邸の執事のゴードンです」

「ようこそおいでくださいました、お嬢様」

落ち着いた感じの執事は、マリエンヌと目が合うとにっこりと微笑み頭を下げる。

温かい出迎えに、マリエンヌもほっと息をついて頭を下げた。

「よろしくお願いします」

「もったいないお言葉でございます。どうぞ、使用人に頭は下げられませんように」

「あっ……」

そうだった。今の自分は生まれながらの伯爵令嬢マーガレット。彼女なら当然、使用人に頭など下げない。

慌てて居住まいを正すマリエンヌだが、執事は不作法を緊張のためと勘違いしてくれたようだ。微笑ましい様子で頷くと、ぱんぱんと手を打ち鳴らす。

メイドたちがぞろぞろ集まってきて、順に名前を告げていった。

「彼女たちがお嬢様付きのメイドにございます。常に控えの前におりますので、なにかありましたらすぐお声をおかけくださいまし」

「ありがとう……」

「では、お部屋にご案内いたします」

モリーという名の年かさのメイドが進み出てきて、マリエンヌを階段へと導く。年齢と雰囲気からして、おそらくメイド頭に違いない。

広々とした階段を上がり、三階の南側の部屋……おそらくもっとも日当たりがいいであろう部屋に足を踏み入れる。

「ま、あ……っ！」

そこに広がっていたのは、まさに『お姫様の部屋』だった。

伯爵邸もそこそこの広さがあり、マーガレットは山のような衣装や小物をしまうために、私室以外にももう二部屋、余分に部屋を使っていた。

だがこの部屋は、その二部屋を入れてなお余るほどに広々としている。

日常を過ごす居間だけでも、小さな民家がそのままおさまりそうなのに、なんと専用の応接間と図書室、音楽室までついていた。

図書室には物語本や伝記など、女性が好みそうな本がぎっしり詰まっている。音楽室にはピアノやハープだけでなく最新の楽譜まで揃えられていて、傍らにはダンス用の靴を収めた可愛らしい靴箱まであった。

居間には猫足の長椅子やテーブルの他に、書き物をするための文机や安楽椅子も置かれている。大きく取られた窓の向こうは広々としたバルコニーで、そこにも寝椅子と小机が見えた。
さらに奥には寝室と衣装室、そして浴室まで備え付けられている。
あまりの豪華さに、マリエンヌは驚きを通り越して目眩を覚えた。
ここは本当に一介の商人の家なのだろうか？
こんな豪勢な部屋に住めるのは、それこそ城住まいの王族や大貴族しかいないと思っていたが……いや、伝統的な城に住むより、最新設備のこの邸に住むほうがずっと贅沢なのは間違いない。
浴室には最新式の金の蛇口がついており、コックを捻れば水とお湯の両方が出る仕組みになっているというのだから驚くほかない。
（お湯を沸かす必要がないなんて、信じられない……）
バーバラ夫人やマーガレットが入浴するとき、厨房で沸かしたお湯を何度も何度も部屋へ運んだ記憶がよみがえる。舞踏会がある日は上を下への大騒ぎで、無事に彼女たちを送り出したあとは、使用人全員がぐったりと疲れ切っていたものだ。
「お時間が迫っておりますので、入浴は控えておきましょう。蒸らしたタオルを持ってまいります。それでお身体を拭いてください」
「は、はいっ」
慌てて答えたマリエンヌだが、メイドたちがタオルを手に迫ってきたのを見て、裸のまま逃げ出したくなった。

お手伝いします、と頑固に言い張る彼女たちを必死の思いで振り切り、自分の手で身体を清める。温かなタオルは気持ちよかったが、恥ずかしさのあまり身体はカッカと火照っていた。
おそらく、マーガレットだったら躊躇うことなくメイドたちに身体を拭かせていたのだろうが……マリエンヌはとても同じことをする気にはなれない。
なんとか身体を清め、浴室から出て行くと、メイドたちはすでに着付けの準備をして待ち構えていた。
伯爵邸から持参したものではなく、用意されていたらしい下着を出される。
それがあつらえたようにぴったりであることに驚きつつも、コルセットの紐をぎゅうっと締めつけられた途端、あまりの息苦しさに、そんな疑問はどこかに吹き飛んでしまった。
ドレスは季節に合わせた若葉色で、なんと真珠のネックレスまで用意されていた。
真珠はダイヤモンドより高価だと聞く。マーガレットですら特別な日以外は身に付けないというのに、結い上げた髪にも真珠の髪飾りをつけられ、マリエンヌは恐れ多さのあまり卒倒しそうになる。
「失礼いたします。ただいま旦那様がお戻りになりました。一刻後に晩餐となります」
「まあ、急がないとね」
リチャードの言葉に、メイドたちが急いで化粧を施していく。
最後にレースのついた絹の手袋を身につければ、支度は完了だ。
「食堂へご案内いたします」

リチャードは着飾ったマリエンヌを見るとたちまち瞳を輝かせた。
「いやあ、王宮で見たどんなお姫様方よりずっとお綺麗です。そんな方をエスコートできるなんて、男冥利に尽きますね」
過剰な褒め言葉にマリエンヌは曖昧に笑う。
もし自分が美しく見えるなら、メイドたちの化粧や着付けのおかげだと、マリエンヌは疑いもなく考えていた。
慣れない裾捌きに戸惑いつつ、なんとか階段を下り終え、一階の食堂へと向かう。
クロスの掛けられた長いテーブルの上座には、すでにロークスが着席していた。
彼はマリエンヌに気づくと、わざわざ立ち上がって椅子を引いてくれる。スマートな仕草にも、晩餐用の正装をかちっと着こなす姿にも胸が高鳴って、マリエンヌはたちまち真っ赤になってしまった。
「わたしの邸へようこそ、レディ。部屋は気に入ってもらえたかな？」
「は、はい。とても、素敵で……」
ぎくしゃくしながら席に着くと、ロークスはわざわざマリエンヌの右手を取って口づけてくれる。
手袋越しでも伝わる温かな唇の感触に息を止めると、彼は少し安堵した様子で微笑んだ。
「治ったようだな」
「え……」
「ここにあった傷だ」

親指の腹で人差し指を撫でられ、その熱に、マリエンヌはどきりとした。
「は、はい。さほど深い傷ではありませんでしたので……」
「言ったとおりだろう？　舐めていれば治ると」
彼の舌が悪戯っぽく唇を舐めるのを見て、マリエンヌは痺れにも似た疼きが広がっていくのを感じる。
いたたまれなくて顔を伏せると、ロークスは意味深に微笑んで席に戻った。
「今日のために極上の白ワインを用意させた。舞踏会で浴びるように飲んでいただろう？」
「えっ……」
マリエンヌは目を瞬かせる。確かにマーガレットはワインが好きだが、まさか舞踏会でもそんなに飲んでいたとは思ってもみなかった。
「え、ええ。好きなもので……」
「用意した甲斐がある。好きなだけ飲むといい」
給仕がさっそくグラスに白ワインをついでいく。
マリエンヌは困ってしまった。お酒を飲んだことなど数えるほどしかない。それも口にしたのは安いラム酒で、使用人が飲んでいたものを興味本位で味見したくらいだった。
焼けるような味と濃いアルコールに、少し舐めただけでも真っ赤になってしまったが、果たしてワインはどうなのだろう。
とはいえここで断るのはあまりにも不自然だ。結局マリエンヌはグラスを持って、ロークスと乾

杯してしまった。
「あなたとの初めての晩餐に」
ロークスは躊躇うことなくグラスに口をつけ、白ワインをあおる。
その男らしい喉仏が上下するのを見て、マリエンヌは飲む前から胸がいっぱいになってしまった。
なんとか一口だけ白ワインを飲み込み、独特の風味にくらくらしながら、前菜の説明を受ける。
これだけのお邸ならば当然ともいうべきだが、運ばれてくる料理はどれも旬の食材を使った絶品ばかりだ。肉や魚もよく脂がのっていて、丁寧に煮詰めたスープも舌がとろけるほどに美味しい。
付け焼き刃のテーブルマナーを気にする必要さえなければ、心からこの晩餐を楽しむことができただろう。
「川魚はあまり口に合わないかな？　ワインも進んでいないようだが」
「いいえ……その……」
「緊張しているのか？　なに、格式張ることはない。貴族の晩餐会とはわけが違うのだから」
そう言われても、マリエンヌにはここが王宮の一室のように思えてしまう。
長テーブルはもちろん、観賞用にかけられた絵画も見事なものだ。こうして座っているだけで厳粛な気分にさせられてしまう。
それでもなんとかデザートまで食べきり、マリエンヌは一仕事終えたときのようにほっと安堵の息をついた。
だが迎えにきたメイドについて食堂を出ようとしたとき、ふらりと膝から崩れそうになってしまう。
「――っと」
倒れそうになったマリエンヌを、ロークスが大きな手で受け止める。腰に回された腕は思いのほか熱くて、マリエンヌは火にでもさわったかのように彼から飛びのいた。
「ご、ごめんなさい」
しかしロークスはそのままマリエンヌの膝裏に手をかけ、横向きに抱え上げた。
突然のことに、マリエンヌは小さく悲鳴を上げる。
「お、降ろしてくださいっ」
「大人しくしていろ。部屋まで送ってやる」
結構です、と訴えてみるも、彼は聞き入れずにそのまま食堂を出る。
使用人たちはなにも言わず主人たちを見送る。マリエンヌは結局、寝室へと運ばれてしまった。
「きゃっ……！」
柔らかなベッドの上に放り出され、マリエンヌは身体を強ばらせる。
スプリングが利いたベッドだけに痛みはないが、間を置かずロークスまで乗り上がってきたのには驚かずにいられなかった。
「い、いや……っ」
「本当にいやなのか？　乾杯のとき、物欲しそうにおれの喉元を見ていただろう」
マリエンヌはたちまち真っ赤になる。知らずこくんと喉を鳴らすと、ロークスは満足そうに笑っ

て、マリエンヌの首筋に唇を押し当ててきた。
「ひゃ……っ」
ぬるりと生温かい舌が這う感覚が伝わって、マリエンヌはそれだけで身体を大きく震わせてしまう。
ロークスは逃げ出そうとするマリエンヌの両手を片手で押さえつけながら、もう一方の手でタイをほどいた。
マリエンヌの肌を視線でたどりつつ、身体にぴったりと張りつく上着も脱ぎ捨て、仰向けになった彼女の上に本格的にのしかかってくる。
「や、やめて……、いやです、こんな……」
「なぜ躊躇う？　あなたはおれに嫁ぐためにここへやってきたんだろう？」
そうかもしれないが、違う。
彼に嫁ぐのはマーガレットだ。マリエンヌはこんなことをしていい立場にはない。それに、あまり接触してしまえば身代わりがばれてしまうかもしれない。
(ああ、でも……。マーガレットと入れ替わってしまえば、もう二度と彼に会うこともできなくなる)
こうして再会できたことも奇跡なのだ。この一瞬を逃したくない。
深くふれあえば、別れたあとでもっと苦しくなるとわかっているのに――
「……んぅっ」

立ち読みサンプルはここまで

考えている余裕はなかった。
ロークスは前髪を掻き上げた次の瞬間、マリエンヌに覆い被さり唇を塞いできたのだ。
驚きに開いた口から舌が滑り込んできて、マリエンヌの中の罪悪感や理性は、あっという間に気持ちよさに押しやられていく。
「ひ、ぅ……んン、んっ……」
「敏感だな。もうとうに日は落ちている。奔放な夜の顔が出てくる頃合いじゃないか？」
「そ、な、こと……っ」
否定するが、首筋を舐められただけで身体の奥がぞくぞくして仕方がない。
広がったスカートの中でつい膝を擦り合わせると、彼はまた片方の口角だけで笑って、マリエンヌの後頭部に手を差し入れた。
「ひぁ……」
結い上げていた髪がほどかれ、髪飾りがぽとりと枕の上に落ちる。
同じようにネックレスも外され、鎖骨を伝う指先に大きくのけぞってしまった。
「ああ、いや……っ」
「いやじゃないだろう？　そんなに悩ましげな顔をして」
喉の奥でくつくつと笑って、ロークスはマリエンヌの耳たぶにねっとりと舌を這わせてくる。
冷たい耳たぶを熱い舌先によって濡らされ、耳の裏を舐め上げられると、マリエンヌはぴくんと身体を揺らしてしまった。